

読書再開時に提示する情報と内容想起の関連性

相島拓実

電子書籍の普及とともに、日常的な読書において、読書中断を行いながら複数の小説を同時並行的に読むという状況が増えた。しかし、中断を挟んでしまうと既読内容を忘れてしまい、再開後にうまく内容が思い出せないという状況が考えられる。このような読者を支援するため、要約文や挿絵を用いて既読内容の想起を試みる先行研究が存在するが、個々の提示物の生成方法について論じられることが多く、複数の形態の提示物を横断的に用い、効果の違いを調べる研究は見られない。

そこで、本研究では近年発達した生成 AI を利用し、小説の内容に関する複数の形態の提示物を用意し、実験を通してそれらの想起効果の違いを明らかにすることを目的とする。

実験に用いる小説は「ジーキル博士とハイド氏の怪事件」とし、提示物の形態は「要約」、「キーワードリスト」、「画像」の3種類とした。これらの提示物は、実験協力者に読んでもらう文章中から5つの場面を抽出して、この5場面の情報が含まれることを条件として生成した。利用した生成 AI は、「要約」と「キーワードリスト」は「ChatGPT」、「画像」は「Canva」である。また、小説の内容をどれだけ思い出しているのか評価するため、小説の要点を聞き出す要点理解テスト、及び詳細な表現について問う詳細理解テストを作成した。

実験は、筑波大学に在籍する学生12名を対象とし、「要約」、「キーワードリスト」、「画像」をそれぞれ提示する3群と何も提示しない統制群の計4群に分けて実施した。協力者には、まず「ジーキル博士とハイド氏の怪事件」を含む2つの小説の読書をしてもらい、読書中断状況を模した休憩を取ってもらった。その後、それぞれの群に応じた提示物を確認しながら、もしくは何も確認せずに、内容を思い出してもらった。最後に要点理解テスト、詳細理解テストの順でテストを解いてもらった。

実験の結果、要点理解テストと詳細理解テストのいずれにおいても、各群間で有意差は見られなかった。群間の差を示すことが出来なかった要因として、テストの各問や採点方法に問題があったと考えられる。先行研究で使用されたテストに対し、本研究に適したものになるよう、十分な操作を加えられていなかった。仮に提示物の違いによる想起効果の違いがあったとしても、テストの結果には表れなかった可能性が考えられる。一方、画像を提示した群で、小説内の表現を想起できた事例が見られた。また、要約を提示した群で、省略されている内容を間違った内容で補完してしまっている事例も見られた。

本研究の結果、提示物の違いによる想起効果の明確な違いを示すことはできなかったが、画像による小説内表現の想起や提示物による内容の混同が起こる可能性が示唆された。今後の課題は、実験協力者数やテストの実施回数を増やした実験設定を行い、個人差を小さくしたデータを得ること、また、提示物の効果を細かく分析できるテストや、再現性の高いテストの採点基準を考案することである。

(指導教員 松村敦)